第70回日本医学図書館協会総会、極私的報告

園田 國昭*

九州大学附属図書館医学分館

2000年の直前、第70回という節目の総会は、幸い5月晴れの爽やかな季節のもと、20～21日の両日、福岡市の中心街にあるアクロス福岡の国際会議場を使用して開催された。

当番となった九州地区では、福岡大学図書館医学分館を代表機関として、昨年11月に組織委員会を発足させ、鋭意準備を進めてきた。定例的な総会はともかく、21世紀を見据えた医学図書館と協会の在りようが問われている昨今、前日の司書会議（総会で提案される館長司書会議新設案が承認されれば最後となる）の企画に喫緊の課題を展開すべく腐心した。幸い、報告・問題提起をお願いした講師の諸先生方のご協力と、館長を多く含むフロアからの発言により熱気につつまれた会議となり、終わってみれば、組織委員一同大いに安堵し、また意を強くするものがあった。

さて、その司書会議であるが、組織委員会が企画したものがどれぐらい実現されたかという観点から、いささか、報告者の希望的感想もまじえて振り返ってみたい。

午前中は、医学図書館に深刻な打撃を与え、ひいては協会の存立基盤をも揺るがしている外国雑誌購入価格高騰問題について、「外国雑誌問題と電子メディア」と題するセミナーを行った。福岡歯科大・宮國剛司氏の司会のもとに5名の報告者

より報告を受けた。

まず、熊本大・阿陪光恭氏が、導入部の役割を果たすべく、当番地区で本企画を提案した際、地区の外国雑誌問題の現状について、九州地区医学図書館協議会加盟館にアンケート調査を行ったのでその集約結果を報告した。各館とも中止を余儀なくされる中で、どこの館にも同じようなタイトルが並ぶのではないかと懸念されたが、回答9館中で1館しか所蔵しないタイトルがまだ5割強あり、各館が踏ん張っている状況が明らかにされた。また、元気の出る挿話として、本調査に協力いただいた協会未加盟館から、ぜひ阿陪氏の報告を聴講したいと参加費を払って出席いただいた方があったことを付け加えておきたい。

次いで、協会分担購入検討委員会の殿崎正明氏（日本医科大）より、「分担収集と電子的情報資料の共同利用」と題して、最近2回にわたって実施された調査結果を踏まえて報告を受けた。加盟館が購入している高額誌が例示されたが、例えば、300万円以上するBrain Research (Series)を70数館が購入しており、すでにそのオンライン版も頒布されている状況で、地理的近接あるいは電子版の活用により分担収集を検討できないかと訴えられた。協会は設置母体の相違や規模の大小など困難な側面をかかえているが、分担購入の可能性の追求は、今協会に何ができるか、へのチャレンジであると感じた。

3番目として、ユサコ(株)電子メディアグルー

*Kuniaki SONODA : 〒812-8582 福岡市東区馬出3-1-1.
sonoda@lib.kyushu-u.ac.jp

(1999年7月8日 受理)

プ長の増田豊氏に「外国雑誌価格問題とオンラインジャーナルの動向」と題する報告をいただいた。増田氏は海外の動向に明るく、ちょうど、米国から帰国されたばかりだったので、有名なコンソーシアムである OhioLink がオンラインジャーナルをあえてローカルにカスタマイズして提供しており、それに要するスタッフ4名を置いていること、また、商業出版社の価格高騰に対する対抗措置として、リーズナブルな価格体系と学術コミュニケーションの強化の新たな動きなど、興味深い話題を提供された。

続けて、協会資料保存委員会が国立国会図書館と共同保存について協議している際の窓口として協力いただいている収書部の山地康志氏に、「国立国会図書館における資料の収集と保存について」の報告を受けた。氏は、国策として国内自給する科学技術関係外国雑誌資料の適正量の策定について言及され、結論部分で、現時点における国立医学図書館の再構想および各レベルの関係機関が共同収集・保存のラウンドテーブルにつくことを提唱され、非常に刺激的な意見、発言であった。

最後に、九州地区国立大学図書館協議会電子化推進連絡会議の下に昨年11月設置された電子的資料の共同購入検討ワーキンググループ主査の浜崎修一氏(熊本大)に、その活動状況について中間報告を受けた。前年度の地域共同サーバによる引用データベース「Web of Science」共同利用実験の成果を引き継ぎ、電子ジャーナルのコンソーシアム利用について、物品納入のないジャーナルの使用権を認めさせること、費用負担の方法など国の会計制度の壁をどう突破するかを模索を開始しており、出版社や代理店によるコンソーシアム・サイトの認知および価格の提示がなされている状況が報告された。まだ設置母体別の動きであるが、必ずや後続するものに有利な情報や可能性を開示するものと思われる。

以上、真摯かつ密度の濃い報告が相次ぎ、時間

をオーバーして十分な質疑応答を保証できなかったが、午後および翌日総会の発言・討議に引き継がれていった。

午後の部は、「21世紀に向けての医学図書館の展望」と気張ったタイトルでシンポジウムを行った。趣旨については、フロアからの問題提起および意見表明を地区会にお願いした文書から再掲しておく。「21世紀の入口にあたって、日本医学図書館協会の存在意義が厳しく問われていると考えます。経費負担の軽減、個人会員制の導入、分担保存・分担購入の推進、教育研究活動の新たな展開等、懸命の努力がなされていますが、依然として協会加盟のメリットに対する疑義も少なくありません。新たな世紀に、医学図書館および協会が真に医学医療情報の全国ネットワークとして機能できるよう、真摯な討議を期待します」。

まず、福岡大学医学分館長の坂本康二先生が「館長の務め」として報告された。先生には、当番館は逃げられませんよとばかり勝手にお名前をあげさせていただいた。

先生もまた、国立医学図書館の必要性を指摘され、NLM的な日本版データベースの構築とその管理運営を協会が行うことを提唱された。また、1,000点以上の外国雑誌を有し、文献複写業務の増加に館員が忙殺されている状況を報告された。

次いで、愛知淑徳大の山崎茂明先生が発言された。論文でしか知らなかった先生には、恐る恐る

手紙で依頼したところ、協会のためならとすぐメールでご快諾をいただき安堵した。

先生は、1996年頃から「科学的根拠に基づいた医療（EBM）」に関する論文が急増しムーブメントになっていると指摘され、従来の研究志向から臨床志向へのシフト、その先に、患者志向、医療消費者への健康情報サービスの可能性を強調された。

3番目として九州大学附属図書館長の有川節夫先生に登場願った。館長室に依頼に伺い当日の予定を尋ねたところ、パソコンを叩きながら「残念、園田さん、空いてるじゃないか」と笑ってお引き受けいただいた。

図書館資料の週及目録入力や電子化を推進して、卒業生や開業医にサービスする会費制の医学図書館友の会を提案された。また、専門の情報理学の分野では、膨大なインターネット上のテキストデータから必要なデータを迅速・正確にマイニングする手法についてさわりの部分を話された。これは、機械まかせで人がいらなくなるということではなく、むしろ未知の領域を舵とるサブジェクトライブラリアンの可能性を補足された。

続いて、協会名誉顧問の朝倉一先生の報告を受けた。先生は、協会および九大の先輩であり、数回の酒席で喧喧ごうごうのうちにお願いした。

多様化する情報社会に対応するため、「Small Library, Large Knowledge」の標語のもと、図書館業務の見直しとアウトソーシングの可能性に言及され、また、21世紀の図書館員の資質として英語力や利用者ニーズの発見能力などの指摘と教育研究活動の重要性を強調された。フロアからの医学医療情報機関図書館員の専門性の資格認定の提起とはすぐに結びつかないとしても、館員のスキルの蓄積とその組織化は、アウトソーシングの可能性を示唆していると感じられた。

最後に、佐藤和貴専務理事に締めくくっていた。これまでの先生方に対するには、協会と

しては専務理事をおいて他はないと担ぎ出した（大会後、異動で医学図書館を去られたため、最後の舞台を用意したことになり良かったと思う）。

相互利用の推進とそれを保証する総合目録ツール類の作成という70年余の歴史を誇る協会活動の基盤が、学術情報センターシステムの普及により変貌していること。しかしなお、貪欲に最新情報を摂取しようとする医師や医療関係者を利用者としてもつことが、協会の存続根拠であることを確認された。メディカルからヘルスサイエンス図書館へシフトし、看護・体育・福祉の分野にも組織化をはかること。そして機関加盟とともに個人会員を拡大することを提起された。

司会の茂幾周治総務理事には、それぞれに第一線で活躍されている先生方やフロアからの積極的な発言を誘導して結びをつけていただいた。理事や理事会が協会であるのではなく、ここに参加している我々が協会を作るのだ、また、いい仕事をすれば人は残るのだ、と。

以上、午前と午後の部を通観すると、組織委員会の当初の企図をはるかに凌駕するいくつかの方向性が見えてきたように思われる。

まずは、国立医学図書館の現在における意義を再検討して創設に向けての可能性を探ること。これは、館長先生方の主導が不可欠であり、声明や要望書等を決議していくことが指摘された。また、協会に将来計画があるのかという質疑からみると、長期的なターゲットになるであろう。

次に、中短期的な目標としていくつかまとめることができるように思う。

①分担購入や電子ジャーナルのコンソーシアム利用の推進。これは、すでに委員会や研究プロジェクトが動きだしているのだから期待したい。

②ヘルスサイエンス図書館へのシフト。機関・個人会員を含めて組織化の可能性があり、類似団体との提携等も提起された。

③協会の財政基盤の確立。文献複写代行業務や

複写センターの構想が提起されたし、また、蓄積された医学図書館員のスキルのアウトソーシング化、会員制の事業の可能性などが話された。

なお、午後の部の始まりには、日本医学図書館協会奨励賞を受賞された東邦大学医学図書館、平輪麻里子氏が、受賞論文「ネットワーク検索時代におけるキーワードの役割」を発表された。

会場周辺には、14社の企業展示が並び、2日間にわたり活況を呈していた。

また、那珂川に中州のネオンが映える頃には、懇親会が盛大に催され、会場のあちこちに交流の輪ができあがっていた。解散後は、赤提灯が軒を連ねる屋台の焼酎やラーメンなど博多の夜を満喫していただけたであろうか。

さて、総会2日目は、200人近い参加者で会場をほぼ満席にして、開会された。

まず、出席館数が98館で、定足数に達しており本総会が成立していることが宣せられた後、地区代表機関の坂本康二分館長が、昨日の討論にみられるように電子媒体などの情報社会への新たな対応の必要性和、特に、退会は協会の存亡に関わるとして、最後に討論の場を設けたいと挨拶された。

次いで、協会の清金公裕会長が挨拶され、協会の現状と本総会の意義について述べられた。外国雑誌の高騰が加盟館の財政を圧迫しており、その軽減化のための協会の方策、協会財政安定化のための努力、館員のリーダーシップと専門性養成のための協会の教育研究活動など当面する課題について、設置母体の違いを越えて会員が忌憚なく話し合う必要性を強調され、本総会が実りあるものになるよう訴えられた。

引き続き、福岡大学副学長・三好萬佐行先生より、来福を歓迎するご挨拶をいただいた。第70回は、人間に比すると喜寿に当たるとして本総会の盛会を祝された。

文部省からは、多忙の中、学術国際局学術情報課の澤田公和専門員を来賓としてお迎えした。

日頃より、学術情報文献の収集と提供に貢献している加盟館、協会への謝辞の後、大学図書館をとりまく動向についてお話いただいた。特に、6月末に答申が予定されている学術審議会の審議状況について、21世紀を見据えた学術振興全般に関わるものとなること、図書館関係では、学術情報基盤の整備として、遡及目録入力 of 推進、電子図書館機能の強化、保存図書館の設置、情報関連組織の有機的連携の必要性などが盛り込まれるとされた。また、行政改革、国の厳しい財政状況にふれられ、図書館予算も抑制をまねがれないため、各医学図書館においては、利用者のニーズを的確に把握し、それぞれの特性を生かした一層の工夫により大学の基幹図書館となるよう期待を表明された。

続いて、今回都合で欠席された韓国医学図書館協会の姜俊基会長の祝電が披露された。

さらに、物故者への黙とう、名誉顧問紹介、奨励賞の授与等を経て、議長に地区代表機関・坂本分館長、副議長に園田司書会議議長を選出し、司書会議報告の後、議題審議に移った。

議題は次のとおりであった。

- 1) 平成10年度事業報告について
- 2) 平成10年度決算について
- 3) 平成11年度事業計画(案)について
- 4) 平成11年度予算(案)について
- 5) 会則および細則の改正について
- 6) 日本医学図書館協会所有電子媒体資料利用規程の制定について
- 7) 基礎研修会、研究会、継続教育コースの地区持ち回り制の実施ならびにそれに伴う教育大綱の改定について
- 8) 館長司書会議の新設ならびに教育大綱への追加について

以上の議題については、担当理事の提案説明と

質疑応答の後、すべて拍手で承認された。

すでに、午後に入りこんでいたので、地区活動報告は資料を参照することとし、議長が最初に約束していた締めくくりの討議に移った。

議題審議も含めていくつかの論点が提示された。法人化の可能性への質疑や財政面では一層の節約努力の要請があり、国立大学からは財政的逼迫状況と分担購入への質疑や参加にあたっての障害等、また、個人会員の権利および機関加盟館に属する館員の個人会員加盟の可否、などであった。協会に課せられた課題として、今後検討されていくであろう。

最後に、守山正樹福岡大学衛生学教授の「目前の子供たちの多様な環境観を、本のように読み取れるか？」と題する特別講演をいただいた。環境観を探るために、なくなったら困るものは何ですか、というパラダイム転換的設問手法で、日本やアジアの子供たちに面接し、その英知や可能性、

共通性などをあぶりだして開示された。福岡総会の最後を飾るにふさわしい示唆に富む印象深い講演であった。

以上で、すべての日程を終了し、次期当番館代表機関の秋田大学附属図書館医学分館、飯島俊彦分館長の秋田総会への招待の言葉をいただき、閉会が宣言された。

長い報告になったが、わが有川館長がつねづね言及されている持論を紹介して結語とする。

大学の大きな役割は教育である。人類の知的遺産を集積する図書館は、学問そのものは厳粛なものであるが、勉学に励む学生の学問的賑わいの場とならなければならない。

将来にわたって、日本医学図書館協会の総会が学問的賑わいと交流の場になることを祈ります。

では、秋田まで。再見！

なお、本総会で提起された課題のうち、協会の将来構想に関わる、法人化の課題や国立医学図書館構想等については、その後、理事会のもとに将来計画委員会が再編組織され活動を開始したことを付記しておく。

福岡大学当局、坂本分館長、準備段階にご尽力いただいた山田課長、総司会の窪田課長、無理を聞いていただいた大熊補佐ほか分館の皆様、地区の皆様、来賓および講師の先生方、そしてすべての参加者に心からお礼を申し上げます。